Photo_ISHIKAWA NATSUKO

通崎睦美（木琴）

1967年京都市生まれ。京都市立芸術大学大学院音楽研究科修了。マリンバのソリストとして活動する中、2005年東京フィルハーモニー交響楽団定期演奏会（指揮/井上道義）で、木琴の巨匠・平岡養一氏が初演した紙恭輔「木琴協奏曲」（1944）を平岡氏の木琴で演奏。それを機に、氏の愛器と約600点にのぼる楽譜やマレットを譲り受けた。以後、演奏・執筆活動を通して木琴の復権に力を注いでいる。2013年に上梓した平岡の評伝『木琴デイズ　平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』（講談社）で、第24回吉田秀和賞、第36回サントリー学芸賞（社会・風俗部門）を受賞。2018年4月には、ニューヨーク州立大学オスウィゴ校、2024年7月にはクッツタウン大学（ペンシルヴァニア州）からの招きで渡米、コンサートやマスタークラスを行った。また、2000年頃よりアンティーク着物の着こなしが話題となり、コレクションやライフスタイルが様々なメディアで紹介されている。同時期より文筆活動を始め現在に至る。CDに「1935」「スパイと踊子」他。著書に『天使突抜一丁目～着物と自転車と』『天使突抜367』（淡交社）、『天使突抜おぼえ帖』（集英社インターナショナル）他 。2021年、第39回京都府文化賞功労賞受賞。

森本英希（フルート）

京都市立芸術大学大学院研究科修士課程修了。同大学博士後期課程満期退学。テレマン室内オーケストラ首席フルート奏者。京都バロック楽器アンサンブルのリーダー、フルート四重奏団「アンサンブル・リュネット」、現代音楽アンサンブル next mushroom promotionのメンバー。2006年丹波の森国際音楽祭、2012年韓国国際音楽祭等でソリストを務める。フルート・リコーダー・篠笛等様々な笛を持ち替えることの出来る稀有な奏者であり、30種類以上の様々な笛を使用し、個性あふれる演奏会やワークショップを日本各地で行っている。ムラマツフルートレッスンセンター、月光堂楽器店古楽器科講師。

松園洋二（ピアノ）

京都市立芸術大学音楽学部作曲専修卒業、音楽学部賞受賞。同大学院修了。主な作品に、音楽物語「きつねのおきゃくさま」、歌曲集「工藤直子の詩によるうたの絵本」などがある。作品を発表する傍ら、伴奏ピアニストとしても幅広く活動。京都フランス音楽アカデミーや数々のコンクールにて伴奏を務める。京都フィルハーモニー室内合奏団のピアニストを経て、現在、武庫川女子大学音楽学部教授。

TSUUZAKI MUTSUMI XYLOPHONE RECITAL

OPERA et XYLOPHONE

通崎睦美 木琴リサイタル

木琴で愉しむオペラの世界

2024年10月14日（月・祝）13:30開場 14:00開演 サントリーホール ブルーローズ

主催：通崎睦美　　マネジメント：ヒラサ・オフィス

design_TAKASHI TANIMOTO

本日は、「通崎睦美木琴リサイタル～木琴で愉しむオペラの世界」にお越しくださいまして、有り難うございます。

大正時代から昭和初期にかけての日本における木琴黎明期より、木琴（あるいはマリンバ）による『ウィリアム・テル』と『カルメン』は、人気曲として長く弾き、聴き続けられてきました。本日は、当時から演奏されている編曲での『ウィリアム・テル』からスタートし、平成の時代に編曲された『カルメン』までを駆け抜けます。

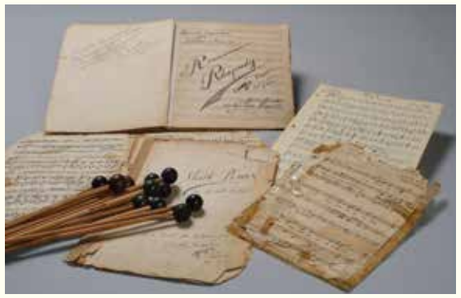
「オペラ」をキーワードとしてお届けする本公演。現代の響きあり、ふと古典派の時代にタイムスリップするような響きあり。どうぞ最後までお楽しみください。

通崎睦美

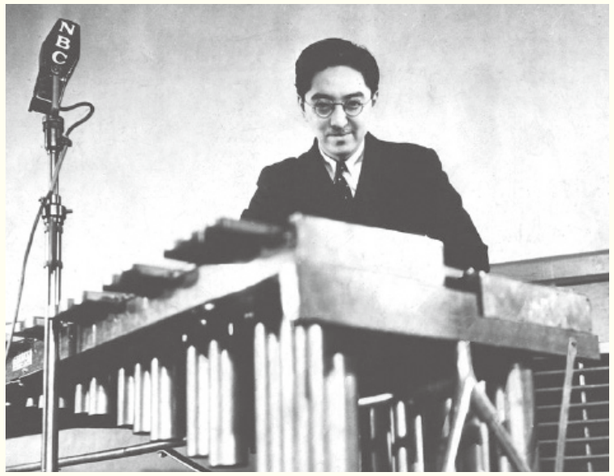
Petit 講座〈その1〉

平岡養一（1907-1981）ってどんな人？

銀座の映画館「金春館」で、楽士の演奏する木琴に惹かれ、独学で木琴を始める。慶應義塾大学在学中にデビュー。1930年、22歳で「木琴王国」のアメリカに渡る。NBCと専属契約を結び、10年9ヶ月もの間、日曜をのぞく毎朝15分のラジオ生放送番組でアメリカの人々に木琴の音色を届けた。「全米の少年少女はヒラオカの木琴で目を覚ます」といわれるほどの知名度を得たが、1941年日米開戦を機に日米交換船で帰国。戦中も精力的な演奏活動を続けた。戦後は、NHK『紅白音楽試合』（『紅白歌合戦』の前身）に出演するなど、クラシックのみならず、タンゴやポップスまでレパートリを拡げ、国民的音楽家となった。1950年、マリンバ奏者でもある宣教師ラクーア夫妻によって、日本にマリンバが上陸。次第に木琴は隅に追いやられ、高度経済成長の時代、豊かなものに憧れる人々の心をつかんだマリンバが主流になっていく。平岡は、1963年再びアメリカに居を移すが、日本でも演奏活動を続けた。晩年の平岡養一は、「僕はね、仮に世界で僕一人だけになっても、マリンバは弾きませんよ。あの楽器だけは、弾きません」という言葉を遺している。



日米交換船で持ち帰った楽譜とマレット



平岡養一、ニューヨークのNBCスタジオにて

TSUZAKI MUTSUMI XYLOPHONE RECITAL

programme

I

歌劇『ウィリアム・テル』幻想曲 | ロッシーニ/クリューガー版、朝吹英一編
William Tell Fantasia *G.Rossini/arr. F. Krüger, E.Asabuki*

喜歌劇『メリー・ウィドウ』ワルツとマーチ | レハール/野口道子編
"The Merry Widow" Waltz and March *F.Lehar/arr.M.Noguchi*

アマリリス 当摩泰久
Amaryllis *Y.Tohma*

影のうた ～歌劇『ディノーラ』より | マイアベーア/松園洋二編
Ombre légère de"Dinorah " *G.Mayerbeer/arr.Y.Matsuzono*

アンノウンワールド | 山根明季子（木琴ソロ）
Unknown World *A.Yamane* (xyl.solo)

喜歌劇『こうもり』序曲 | シュトラウスⅡ/松園洋二編
Ouvertüre zur Operette "Die Fledermaus" *J.StraussⅡ/arr.Y.Matsuzono*

OPERA et XYLOPHONE

II

「二重奏によるオペラ名旋律集」より | モーツァルト/編曲者不詳（木琴+フルート）
Famous melodies from Mozart's operas for duo *W.A.Mozart/anonymous* (xylo.+Fl.)
「僕のドラベッラは」～歌劇『コジ・ファン・トゥッテ』より
"La mia Dorabella" from the opera "Così fan tutte"
「恋人か女房か」～歌劇『魔笛』より
"Ein Mädchen oder Weibchen"from the opera"Die Zauberflote"

トルコ行進曲 ～劇付随音楽『アテネの廃墟』より | ベートーヴェン/野田雅巳編（木琴+フルート+ピアノ）
Turkish March from"Die Ruinen von Athen" *L.V.Beethoven/arr.M.Noda* (Xylo.+Fl.+Piano)

時の踊り ～歌劇『ラ・ジョコンダ』より | ポンキエッリ/松園洋二編（木琴+フルート+ピアノ）
Danza delle ore "La Gioconda" *A.Ponchielli/arr.Y.Matsuzono* (Xylo.+Fl.+Piano)

踊子の紅い花 ～木琴と演奏者の声のための | 伊左治直（木琴ソロ）
Dancer's vibrant red flower fot xylophone and perforer's voice *S.Isaji* (Xylo.solo)

もえろよ、もえろ ～林光のオペラ『森は生きている』による木琴とピアノのための幻想曲 | 寺嶋陸也
Bonfire, burn well! ～Fantasy for xylophone and piano based on the opera "Twelve months" by Hikaru Hayashi *R.Terashima*

インドのうた ～歌劇『サドコ』より | リムスキー=コルサコフ/クライスラー編
Song of India from the Opera " Sadko" *Rimsky-Korsakov/arr.F.Kreisler*

カルメン綺想曲 | ビゼー/松園洋二編
Caprice sur l'opéra "CARMEN" *G.Bizet/arr.Y.Matsuzono*

プログラム・ノート～曲目解説、あるいはこぼれ話

「殿下が好んだウィリアム・テル」

亀井湘南、「オリエントレコード7月新譜」(1922)より

1910(明治43)年、陸軍戸山学校軍楽隊が日英博覧会に派遣され、おみやげとしてヨーロッパの木琴「ストロー・フィドル」を持ち帰ったところから、日本のクラシック界における木琴の歴史が始まった。大正時代になると、「木琴三羽烏」と呼ばれる木琴奏者が誕生する。そのうちの一人、海軍軍楽隊に所属した亀井湘南は1921(大正10)年、皇太子殿下、後の昭和天皇が初めて欧州を外遊された際に、海軍軍楽隊の一員として御召艦「香取」に乗船して木琴を演奏。殿下は、木琴を大変気に入り、「亀井を呼べ」と仰せられ、亀井は『軍艦マーチ』『越後獅子』などリクエストに応えて演奏した。殿下も、自らバチを握り試奏されたという。亀井には、賜金20円、賜盃、ドイツ製の木琴が下賜された。この楽器は、今ではめずらしい、手前から奥へと音が高くなるヨーロッパ・スタイルである。記念に吹き込まれた1922(大正11)年のレコードでは、亀井湘南は殿下が最も好んだという『ウィリアム・テル』をオーケストラ伴奏で演奏している。

「朝吹英一の仕事」

朝吹英一、1927年頃、高輪の自宅にて

「朝吹」と聞けば、多くの人は、『悲しみよこんにちは』を始め、サガンの翻訳を多く手がけた仏文学者・随筆家の朝吹登水子、あるいは小説家・朝吹真理子の名前を思い浮かべるのではないか。しかし、子どもの頃、マリンバや木琴のお稽古をした人にとっては、断然、登水子の長兄にあたる朝吹英一、だ。朝吹英一は、マリンバ/ヴィブラフォン奏者、作・編曲家。1909（明治42）年東京に生まれ、幼稚舎から大学まで慶應義塾に通った。平岡養一の2年後輩にあたる。木琴奏者、後にマリンバ、ヴィブラフォン奏者として活動するが、父の他界をきっかけに音楽活動を退き、父が創立した千代田組の常勤となる。平岡は、基本的に演奏活動を主とし弟子をとらなかったが、朝吹は「日本木琴協会」（現、日本マリンバ協会）を設立し、全国に木琴、マリンバ愛好家の裾野を拡げる活動にも力を注いだ。また作曲も学び、子ども向けの教材、コンサートのレパートリーとして1000曲を越える作・編曲作品を遺している。今日演奏するうち、歌劇『ウィリアム・テル』幻想曲、『メリー・ウィドウ・ワルツ』、歌劇『ディノーラ』より「影のうた」、歌劇『こうもり』序曲、歌劇『ラ・ジョコンダ』より「時の踊り」、『カルメン』については、初心者でも弾きやすいように巧みに編曲された、朝吹によるマリンバ+ピアノ版の譜面が存在するが、本日は、歌劇『ウィリアム・テル』幻想曲（朝吹英一編）、喜歌劇『メリー・ウィドウ』ワルツとマーチ（野口道子編）を除いて、松園洋二による木琴とピアノのための編曲版で演奏する。

notes de programme

アマリリス　当摩泰久

2006年から、平岡養一の愛奏曲『アマリリス』を題材に、現代の作曲家に作品を委嘱するシリーズを続けている。これまでに委嘱した作曲家は13名。鷹羽弘晃、野田雅巳、港大尋、西邑由記子、当摩泰久、高橋悠治、寺嶋陸也、伊左治直、松園洋二、池上敏、後藤洋、山根明季子、織田英子。なお、本日演奏する伊左治直『踊子の紅い花』も本シリーズの一作。
以下、作曲者による解説。

通崎睦美さんの委嘱で書かれ、2012年1月12日に蘭島閣美術館（広島県呉市）で初演（ピアノ：平林知子さん）されました。原曲を調べるうちに、私たちになじみ深い「アマリリス」はモーリス・ラヴェルにピアノの手ほどきを受けたアンリ・ギー(Henry Ghys 1839-1908)の作であり、他にルイ13世 (*Louis XIII de France 1601-1643*) のもの悲しい歌曲の存在が明らかになりました。作曲に着手すると両者は対立、拮抗し始め、我に返った時に仕事が終了したように思えてなりません。ルイ13世作、アンリ・ギー作の順に現れる旋律は「展開部」を経てコーダに至ります。（当摩泰久）

アンノウンワールド　山根明季子

レトロゲームの効果音やBGMから影響を受けて書かれた楽曲。タイトルは「ドラゴンクエスト」（旧エニックス、1986）中の音楽「広野を行く」の欧題 “Unknown World” から引用している。マンドリン奏者の柴田高明さんによる委嘱で、マンドリンの音色から私がチップチューン、つまりコンピュータ黎明期の矩形波を想起したことがこの音楽誕生のきっかけだった。初演を聴いてくださった通崎睦美さんに木琴での演奏可能性を引き出していただき、木琴の楽曲として、その後幾度と音楽を創り届けていただいている。（山根明季子）

「二重奏によるオペラ名旋律集」の魅力

座右の銘という言葉があるが、20代の頃に初めて聴いた、ベルリン・フィルのオーボエ奏者・シェレンベルガーとウィーン・フィルのフルート奏者・シュルツが演奏した本作品のCDは、私の「座右の音楽」である。それぞれが自由にすこぶる楽しく演奏するのだが、アンサンブルは一糸乱れない。たった二人でオペラを想起させる素敵な演奏。この作品が書かれたのは、レコードもラジオもないモーツァルトの時代。人々は、出版された楽譜を入手し、当時話題のオペラの旋律を家庭で自ら再現して楽しんだ。本格的なオペラを手軽に味わえる現代のメディアとは異質の、豊かな文化を感じさせられる。

トルコ行進曲　ベートーヴェン／ 野田雅巳編

原曲は1811年に作曲された戯曲『アテネの廃墟』のための音楽のひとつ。今日ではピアノ編曲版がよく知られているが、オリジナルの編成はトライアングル、シンバル、大太鼓を含む2管編成オーケストラ。今回演奏されるのは、本日の公演のために書かれた編曲で、木琴、フルートとピアノのトリオによる。これには、先行する編曲（木琴とチェロの2重奏、2021年）があり、トリオ版は、そのときのアイデアを基にした拡大版とでもいえるようなつくりになっている。いずれも通崎睦美の委嘱による。（野田雅巳）

notes de programme

踊子の紅い花 ～木琴と演奏者の声のための　伊左治直

2013年に、リコーダーと木琴による『スパイと踊子』という作品を作曲しました。これは大正～昭和初期を舞台にしたミステリーをイメージしていて、そして曲の一部には、ちょっとしたパフォーマンスも含まれていました。いつか踊子シリーズ第2弾のような作品を考えていたところに、「奏者が声をつかう」ことと、レトロな「アマリリス」の曲に関連性ある新作という提案がありました。趣旨がぴったり一致したのです。踊子はもちろん、おかっぱの通崎さん主演のイメージから膨らんだ曲の世界観です。（伊左治直）

もえろよ、もえろ
～林光のオペラ『森は生きている』による木琴とピアノのための幻想曲　寺嶋陸也

19世紀には、よく知られたオペラから採られたメロディをもとに、あるいはオペラのいくつかの場面を繋ぎながら器楽の名人芸を披露するパラフレーズや幻想曲の作曲が流行しましたが、《もえろよ、もえろ》は、その流儀に倣って作った曲です。林光さんのオペラ《森は生きている》の中の歌は、保育園や学校で多くの子どもたちにも歌われて親しまれています。この幻想曲では、劇の筋とは関係なく、オペラのテーマ・ソング「森は生きている」から始まり、「カラスの歌」「ウサギとリス」「若い月たちの歌」「十二月のうた」と楽しい歌の数々を巡ります。（寺嶋陸也）

『インドのうた』で「木琴はうたう」

平岡養一は、1941年にアメリカで出版した木琴小品集『Celebrated　Artist　Series　XYLOPHONE　ALBUM』（EDWARD B.MARKS MUSIC CORPORATION）の序文に「We must prove to people that the xylophone can sing.（我々は木琴が歌えるということを証明しなければならない）」という言葉を遺している。オペラ『サドコ』の中で、インドの商人（テノール）が歌い上げる神秘的な旋律の「インドのうた」は、いわゆる木琴のイメージからは最も遠いものかもしれない。しかし同時に、平岡の言葉を実証できる曲であるともいえる。

「木琴とカルメン」

平岡養一は、1929（昭和4)年、渡米の資金を稼ぐため、10枚のレコードを録音した。翌1930年1月に発売されたビゼー「カルメン抜粋曲」が、平岡のデビュー盤となる。ポリドールの新譜月報に、こう紹介されている。〈ずい分、妙な褒め方ですが、この人のテクニツクはドイツ・ポリドールの木琴演奏家クリユーゲル以上だと激賞した人があります。が、それはともかく、誇張なしに、外國の一流に何等遜色のないシロホニストであるとは云えませう。〉木琴で弾くカルメンは大変な人気で、戦前でいえば、朝吹英一、そして大正10年頃から15年ほど活動した大阪宗右衛門町の芸妓による少女ダンス団「河合ダンス」のセキ子による録音もある。本日は、「前奏曲」「子ども達の合唱」「ハバネラ」「アラゴネーズ」「ジプシー・ソング」「行進曲と合唱」からなる、木琴の技巧を活かした松園洋二編「カルメン綺想曲」を演奏する。

Petit 講座〈その2〉

木琴とマリンバは、どう違う？

「パイプの付いているものがマリンバ、ついていないものが木琴」、あるいは「木琴の上等なものがマリンバ」などと言われるが、これは正確な説明ではない。日本では、木の鍵盤が並んだ楽器の総称を「木琴」と呼ぶので、コンサート用のマリンバからおもちゃのモッキンまでを「木琴」といっても間違いではない。そこが話をややこしくするのだろう。ちなみに、ヴィブラフォンやグロッケンの鍵盤は金属なので「鉄琴」のグループに入る。ここでは、クラシック音楽で使われる狭義での「木琴（Xylophone,xilofono）」と「マリンバ（Marimba）」の違いをごく簡単に説明する。

木琴もマリンバも、コンサート用の楽器の鍵盤は、共にホンジュラスのローズウッドが最適とされる。鍵盤の裏面を削ることによって調律し、音程と音色を作るのだが、木琴は、オクターヴと5度上の倍音をとるので、明るく軽やかで歯切れのよい音色。マリンバは、2オクターヴ上の倍音をとるので、豊かな残響と甘くて柔らかい音が特徴となる。

歴史的な側面からみても、大きな違いがある。木琴はルネサンスの時代からヨーロッパで演奏されていた。ヨーロッパの移民が、束ねた藁のレールの上に木片を並べたコツコツと可愛らしい音色のする木琴「ストロー・フィドル」をアメリカに持ち込んだ。後に鍵盤打楽器製造のトップメーカーとなるディーガン社（シカゴ）の創始者、J.C.ディーガン氏(1853-1934)は、この楽器に着目。手前（低音）から奥（高音）へと並んでいた鍵盤をピアノと同じ左（低音）から右（高音）へと並び替え、調律をほどこし共鳴管を付けて、販売を始めた。1900年初頭のことだ。
一方マリンバのルーツは、共鳴器として瓢箪が取り付けられたアフリカの鍵盤打楽器「バラフォン」にある。三角貿易の時代、奴隷として連れてこられたアフリカの人たちがこの楽器を中南米に持ち込んだ。バラフォンは座奏、あるいは腰に結わえたり首から紐で吊したりして演奏していたが、1894年、グァテマラのセバスチャン・ウルタードが、立って演奏する現在のマリンバの原型を作った。ちなみに、グァテマラでは、現在もこの形の楽器が国民楽器として演奏され、この地がマリンバの発祥とする説もある。
ウルタードは、息子達と結成したマリンバ・バンドで1915年「サンフランシスコ万博」に参加。ここで披露されたラテン・アメリカのマリンバ（豚の腸で作った「振動の膜」を取り付けた杉板製の共鳴管を持つ大型のマリンバ）によるアンサンブルが爆発的ヒットとなる。これに目を付けたディーガンは、木製の共鳴管を金属製に変え、三味線の「さわり」のような音を出す、特徴的な「振動の膜」を取り除き、調律を施して現在の形の「マリンバ」の販売を始めた。
木琴とマリンバの両者は、ディーガン氏のアイディアと技術で、クラシック音楽の演奏にも対応できる楽器となったが、民族色を取り除き澄んだ音色になった時点で「似たもの同士」になった、といえる。
なお、オーケストラやブラスバンドで使われる現代の木琴は、総じて鍵盤の幅が狭く甲高い音がするが、「ディーガン・アーティスト・スペシャル・ザイロフォン」のシリーズは、鍵盤が広い上に、今では入手することができない上質のローズウッドを使用しているので、特別に味わい深い音色を持つ。

左）ポストカード、ヨーロッパ・スタイルの木琴を弾く少女

右）パンフレット『全日本ラクーア音楽伝道～曲目と解説』（キリスト新聞社）より「キング・ジョージ・マリンバ」（デザイン：C.O.マッサー、製作：ディーガン社）を演奏するラクーア音楽伝道団